

新民族主義史学における古代史の展開

解放前後の孫晋泰の認識を中心として

金廣植

前韓国語講師、大阪大学大学院博士課程

1. 忘れ去った朝鮮民俗学者

孫晋泰（ソン・ジンテ；1900～1960年代半ば？）¹は、朝鮮の中学を卒業してから、1920年日本に留学した以来、約15年間、帝国日本で修学し、東洋文庫に務めながら、朝鮮民俗の専門家として研究に取り組んだ民俗学者である。彼は既に1923年から帝国日本と植民地朝鮮の雑誌に日本語と朝鮮語を使って、精力的に執筆していた。1920年代までには主に朝鮮語の雑誌に数多くの論文を掲載してきた孫は、1930年代に入るとは、日本語で本格的に単行本や論文を著述することとなる。日本語での執筆は、特に1931年9月から1933年12月にかけて際立っている。その2年余りの期間中、『郷土研究』に「支那及朝鮮に於ける巫の腹話術に就て」（5-4）、「巫の腹話術追記」（5-5）などの9編の論文を、『民俗学』に「蘇塗考」（4-4）、「蘇塗考続補」（5-4）、「朝鮮民家型式小考（一）」（5-5）、「朝鮮のDolmenに就て」（5-6）などの12編の論文を掲載している。また、『ドルメン』『郷土』『旅と伝説』『史観』などにも7編の論文を発表している²。この期間中に発表した朝鮮語の論文を合わせると2年余りに31編の論文を発表したことになる。きわめて超人的な作業といえよう。孫は、1932、33年に「帝国学士院の学術研究費補助」に受け、数回にかけての朝鮮民俗資料蒐集旅行を行っており、旅先で原稿をまとめることも少なくなかった³。当時の民俗学分野において、植民地朝鮮人の中でこれほどの活躍をした人は他に例を見ることができない。同時期における民俗学関連の雑誌を通読するだけでも孫の名は際立っている。孫は執筆だけにとどまらず、柳田国男や金田一京介などの名士の談話会に続き、朝鮮を代表する学者として認められ、「孫晋泰を囲む民俗学談話会」（1934年4月22日）が行なわれるなど特段の待遇を受けており、その認知度は高かった⁴。

しかし、1934年の春、突然朝鮮に帰国して以来、少なくとも孫は日本での「民俗学界」で次第に忘れ去られてきたといえるのではないだろうか。それを証明してくれるかのように、戦後の日本で孫に関する研究は、ほとんど行なわれてこなかった。唯一、坂井俊樹の「韓国解放直後における民族主義歴史教育の主張とその葛藤」⁵という論文で、解放後の所謂「新民族主義史学」が検討されているのみである。

他には『朝鮮人物事典』に孫晋泰の項目があり、次のように簡略に記述されているのみである。「歴史学者、民俗学者、慶尚南道出身。1927年早稲田大学文学部史学科卒業。早くから朝鮮の民俗学的問題に関心をもち、戦前にすでに日本語による『朝鮮の民話』（戦後岩崎書店により復刊）『朝鮮古歌謡集』『朝鮮神歌遺篇』などの著作がある。解放後はソウル大学校の師範大学・文理大学の学長（日本の学部長にあたる）などをつとめ、1950年の朝鮮戦争のさいに行方不明となる。新民族主義の立場から民族史の重要性を力説し、独特の史観に立脚した『朝鮮民族史概論』『国史大要』や『朝鮮民族文化の研究』『朝鮮民族説話の研究』などの著作がある」と⁶。

坂井の論文と『朝鮮人物事典』の記述は、解放後における孫の「新民族主義史学」についてふれているものの、解放前の孫に関する具体的な分析が行なわれていないという限界がある。ある個人の学問の成立は、その主体の歴史的経験と軌跡に基づくと前提すれば、解放前における孫の思想を明らかにし、それを踏まえて、解放後の「新民族主義史学」の展開を究明する作業が求められていると、筆者は考えている。この論文では、解放前と解放後の論文を読み比べることにより、孫の思想の一端を検討してみたい⁷。

2. 孫晋泰に関する先行研究とその評価

孫晋泰は1900年12月28日、朝鮮の慶尚南道東萊郡（現在は釜山市）沙下面下端里で生まれた。5

歳の時に津波で祖母と母を失い、親戚の所を転々とした。9歳で小学校に入学、1911年頃京城に上京し中東学校に通うことになるが、経済的な問題で1917、18年頃は平壤で約1年ほど働いたこともあった。1919年の朝鮮3.1独立運動の際には、それに参加、短期間服役したこともある⁸。中東学校を卒業してから1920年日本に渡り、1921年4月早稲田第一高等学院予科に入学、1924年3月卒業後、同年4月早稲田大学文学部史学科に進学、1927年3月卒業した。在学中は西村真次(1879~1943)、津田左右吉(1873~1961)、窪田空穂(1886~1954)らから大きな影響を受けた。大学を卒業した後、1925年頃から出入りしていた東洋文庫に勤めることとなり、1934年2月8日まで在職した⁹。1934年春、帰国して延禧専門学校で非常勤として勤め、9月からは普成専門学校に在職することとなり、1945年8月に解放を迎えた。解放空間の中でソウル大学教授と高級官僚として新しい国民国家建設に精力的に励んだが、1950年の朝鮮戦争の際、北に連れ去られ、政治的にも学問的にも次第に疎外され、1960年代半ばに死亡したとされている。

次に、解放後韓国での孫晋泰の研究を概観してみたい。孫に関する従来の先行研究は、新民族主義史観が持っている観念的な側面に対する批判があるものの、彼の学問そのものについては高く評価されていた。まず歴史学から孫を積極的に評価したのは、金容燮の研究である。金容燮は、「南滄[孫晋泰の雅号 - 以下〔 〕は引用者注]が到達した民族史の理論は、対内的には民族を構成する全社会階級の矛盾関係と意識の問題を社会発展の体系の中で認識し、対外的には我が[朝鮮]民族の他民族に対する闘争と文化交流を通じた民族文化の成長を、対内の問題としての社会発展の論理と連結させてそれを全民族の成長発展という体系の中に展開せんとするものであった。換言すれば、民族成長の論理と社会発展の論理をひとつの論理として総合することにより、我々の歴史をより幅広い民族史として把握せんとするものであった」¹⁰と孫の新民族主義史学を高く評価した。その後孫の学問は、帝国日本に対抗した「韓国民族主義史学」の流れを受け継ぐものとして位置づけられてきた。

例えば、李基白は、孫の新民族主義史観は「韓国史学の発展のための新たな基盤作業をしておいたものだと言っていい。彼は自ら<先駆的な役割でもできれば>と望んでいたが、彼のそうした願いはそのまま遂げられた」¹¹と評価している。また金貞培は、孫は民族主義史観と社会経済史学を批判的に総合することにより、「徹底的に庶民大衆の発見を目標とした歴史」¹²を確立したと主張しており、呉太任は「南滄は日帝末から解放直後の韓国の社会相で民族的団合を促した新民族主義に基づいて民族史を叙述した」¹³と評価している。また韓永愚は、民衆的民族主義に基づき「『民衆』を発見」¹⁴した孫晋泰像を提示しており、金壽泰は「新民族主義史学者たちは日本帝国主義の強圧の中で受けた民族の試練を精神的に克服しようと努力したが、そうした努力の産物がまさに新民族主義史観であった」¹⁵と主張している。

一方、民俗学からの評価として李弼泳は「民俗を中心とした民族文化に関する孫の関心は、1940年代の太平洋戦争を前後として当時の民族主義史学、実証主義史学、社会経済史学を批判・克服しそれを総合した新民族主義史観として展開し、彼はこれに立脚して新しい韓国民族史を構造するようになった」¹⁶と歴史民俗学として位置づけている。沈雨晟は、「日帝帝国主義治下で活動した学者の中で最も学者らしい学者」¹⁷だと高く評価しており、柳基善は、「孫晋泰の思想史における歴史学と民俗学は、正反合の弁証法的関係を成している。孫は、初期には歴史学を志望したが、当時の歴史学の限界を認識し、民俗学にかえて解放以前まで研究を築いた。そして日帝強占期末の変化された現実認識により、解放以降には新民族主義史観に立脚した歴史叙述に没頭したのである」¹⁸と主張している。このように歴史学と民俗学からのアプローチで夫々孫の学問を位置づけているが、いずれも民俗学から民族史への展開を発展的な道程と定め、「新民族主義史観」はその完成だとしている。しかし、従来の研究は、解放後の孫の著作を中心とした分析がほとんどであり、解放前に発表された「日本語論文」に対する具体的な分析なしに、解放後の論文を以って解放前の孫を評価しているという限界がある。

近年、そうした従来の研究に対する問題提起が行なわれている。朴京夏は、孫の立場を「脱政治的な文化的民族主義」だと規定して、「日本人学者が設定した枠の中で動くしかなかった」¹⁹と主張した。また宋華燮は、孫の民俗に対する観点は日本の植民史観と根本的な差異がないと指摘して「孫晋泰の研究方法が近代的であるということは確かだが、日本人学者らの研究風土に便乗しながら植民地的な民俗研究の傾向を従ったものだといえる」²⁰と主張している。孫の学問の性格をめぐる本格的な問題提起は、南根祐により行なわれてきた²¹。

南は従来の研究史における孫晋泰の学問の成立背景と性格規定に対して批判的にアプローチしている。まず、早稲田大学史学科在学時代の西村真次の人類学と津田左右吉の実証主義史学に対する学問的影響と、東洋文庫在職時代の白鳥庫吉(1865～1942)との関係を分析してから、1920年代半ばから1930年代半ばにかけての孫が旺盛に展開した文化論を批判的に検討している²²。次に「孫晋泰の民族文化論と満鮮史学」の中で、孫は檀君肯定論を「感想的民族主義だと批判して、白鳥・津田の実証史学と西村の文化史的方法に自分の現地調査を結節して旺盛な民族文化論を展開」したが、「彼の文化論を丁寧に調べてみると、檀君否定論以外にも満鮮史学と幾つか相通する点がある」と指摘している。また「孫晋泰は白鳥をはじめとした満鮮史学者たちと人脈上で近かったのみならず、学問的にも彼らから少なからぬ影響を受けた」²³と指摘している。つづいて「土民」の「土俗」発見と「新民族主義」では火田民に関する孫の関心と言及を中心に検討して、火田民に関する1920年代の「浪漫的関心」は1930年代に入り「現在の関心」に転換されたとして、火田民と彼らの生活に関する関心よりは累木家屋のような古俗の残存物を「採集」するために火田民の村を訪ねた孫がそこで累木家屋とともに発見したのは、草木根皮の現実を苦しく暮らしている火田民ではなく、自然の一部分として犬の仔、豚の仔と同居している「土民」だったと指摘して、従来の研究で一般化された「民族」と「民衆」の発見者としての孫晋泰像を見直している²⁴。

1981年には『孫晋泰先生全集(全6巻)』(大学社、以下全集と記す)が李基白により、不完全な形ででありながら全集が発刊された後、近年に入り、孫晋泰に関する二つの学術シンポジウムが行なわれ、孫晋泰の学問が再び注目を浴びた。ひとつは、2000年12月に行なわれた「南滄孫晋泰先生誕辰100周年記念学術シンポジウム」(韓国歴史民俗学会・高麗大学博物館の共同主催)であり、もうひとつは2002年に孫晋泰が韓国文化観光部主催の「12月の文化人物」に選定され、その記念事業として2002年12月に行なわれた「12月の文化人物記念学術シンポジウム」である。2000年、遺族から寄贈された資料などを整理して、2002年には崔光植編訳の《朝鮮 上古文化 研究(朝鮮上古文化の研究)》と崔光植編の《民俗 歴史(我々の民俗と歴史)》(高麗大博物館)が発刊された。また、二つのシンポジウムの成果をまとめて、2003年には韓国歴史民俗学会編の《南滄 孫晋泰[○] 歴史民俗学研究》(民俗苑)が出版された。しかし、これで孫晋泰の学問の全貌が明らかになったわけではなく、むしろ本格的な検討の始発点になったといえよう。なぜなら、《南滄 孫晋泰[○] 歴史民俗学研究》を通読するだけでも、彼の学問の性格をめぐる正反対の意見が浮き彫りになっているからである。孫の学問をたたえる論文集の中には、前述した南根祐の論文も掲載されており、注目に値する。

しかし、南の問題提起に対して、それを批判する論者が論拠として提示している文献は、ひたすら「孫晋泰の書いた解放後の論文からの引用」にとどまっている。孫晋泰の解放前の論文に対する具体的な検討を行わず、ひたすら解放後の著作のみを根拠にして、解放前の孫の軌跡をたたえる研究は大いに説得力を欠いている。南の問題提起にはイデオロギー的で感情的な批判ではなく、解放前後に書かれた孫の日本語とハングルによる論文を緻密に対照・分析する作業が求められている。次の章では、筆者が新たに発掘した資料に基づき、彼の古代史認識の展開とその実体を考察してみたい。

3. 孫晋泰の業績と新資料の発掘

孫晋泰は短い学問活動の中で多くの著作を発表している。その発表が広範囲に及んでおり、従来その書誌を明らかにされていない。初めて孫の書誌を整理したのは、李基白の「孫晋泰先生年譜(全集1巻、1981年、23～28頁)」であるが、日本語雑誌などにおける誤字などの間違いと抜け落ちが目立っている。続いて崔在錫が「孫晋泰著作文献目録」(《韓国学報》39、1985年、179～183頁)で孫の文献目録を整理しているが、全集の書誌のように抜け落ちと間違いが際立っている。このような間違いを正したのは柳基善であるが、柳は「1930年代 民俗学研究[○]」断面(《民俗学研究》2号、1995年、61～64頁)で全集の書誌を補充するにとどまっている。また前述した二つのシンポジウムの成果をまとめた、韓国歴史民俗学会編の《南滄 孫晋泰[○] 歴史民俗学研究》(民俗苑、2003年、333～337頁)にも崔光植による「孫晋泰論著目録」が作成されているが、それは基本的に柳基善の書誌を参考にして作成するにとどまっている。しかし、以上の四つの書誌いずれも日本語雑誌の書誌において多くの間違いと抜け落ちが多い。ハングル文献にも幾つかの間違いがある。

筆者は南根祐の研究論文における脚注なども参照し、膨大な書誌調査作業を行なった。その結果、新たに 30 編以上の孫の論文と六つの座談会の記録、そして多くの新聞記事などを発掘、新しい書誌の作成を試みた。*印のあるものは筆者が新たに発掘した資料で、**印は南根祐の論文における脚注から教示を得たものである。***印は植民地京城で発刊された『朝鮮思想通信』という日刊紙に翻訳されたものである。また、文献の混乱を避けるために、ハングルでの論文及び単行本は、原文と日本語訳を併記して夫々《 》で表し、日本語での論文及び単行本は「 』』で表すことにしたい。

孫晋泰の執筆著作目録

- 1923 年 10 月 神話上 古代人 女性観（神話上から見た古代人の女性観）《新女性》1 - 2
 1923 年 11 月 詩 外一篇（流れ星外一篇）《金星》1 号
 1923 年 11 月 詩 萬壽山 外一篇（萬壽山にて外一篇）《金星》1 号
 1924 年 1 月 小品 遁世者 （遁世者の目）《金星》2 号
 1924 年 1 月 訳詩 - （彼方のカササギ ゴルスワート）《金星》2 号
 1924 年 1 月 詩 処女 秘密外三篇（処女の秘密外三篇）《金星》2 号
 1924 年 5 月 散文詩 生 哲学外三篇（生の哲学外三篇）《金星》3 号
 1924 年 5 月 訳詩 散文詩（ツルゲネフ散文詩）《金星》3 号
 1924 年 5 月 童詩 外一篇（キスと抱擁外一篇）《金星》3 号
 1925 年 11 月 「朝鮮に於けるシャマニズム」『東洋』（東洋協会）28 - 11
 * 1926 年 1 月 （お兄ちゃん、もう帰って下さい）《^{オリ}（子供）》4 - 1
 * 1926 年 1 月 西伯利亚 各民族^o 結婚形式 《新女性》22（4 - 1）
 * 1926 年 3 月 世界珍奇 結婚形式 - 西伯利亚 各国民族 結婚形式(其二) 《新女性》24（4 - 3）
 * 1926 年 4 月 ツングス 族 アルタイ 族^o 結婚式 - 西伯利亚 各民族^o 結婚形式(其三) 《新女性》25（4 - 4）
 * 1926 年 5 月 西伯利亚 民族 結婚儀式(其四) 《新女性》26（4 - 5）
 * 1926 年 5 月 「朝鮮の古歌と朝鮮人」『東洋』第 29 年 5 月号
 1926 年 5 月 土俗研究 旅行記 《新民》13 号（2 - 5）
 1926 年 7 月 詩調 詩調 表現 朝鮮 （詩調と詩調に表現された朝鮮の人）《新民》15 号（2 - 7）
 * 1926 年 8 月 「朝鮮の童謡」『東洋』第 29 年 8 月号
 1926 年 8 月 朝鮮上古文化^o 研究 - 朝鮮家屋 形式^o 人類学的 土俗学的研究 《新民》16 号（2 - 8）
 1926 年 9 月 朝鮮上古文化^o 研究 - 朝鮮家屋 形式^o 人類学的 土俗学的研究 《新民》17 号（2 - 9）
 * 1926 年 9 月 「朝鮮の子守唄と婦謡」『東洋』第 29 年 9 月号
 1926 年 10 月 朝鮮上古文化^o 研究 - ‘^{シメナフ}’ 文化^o 土俗学的研究 《新民》18 号（2 - 10）
 1926 年 11 月 朝鮮上古文化^o 研究 - ‘蘇塗、積石壇、立石’^o 土俗学的 宗教学的研究 《新民》19 号（2 - 11）
 * 1926 年 11 月 「西伯利亚白鳥伝説の一特徴に就て」『民族』2 - 1
 1926 年 12 月 金太祖^ハ 黃海道人也> 《新民》20 号（2 - 12）
 1927 年 2 月 朝鮮^o 童謡^ト 児童性> 《新民》22 号（3 - 2）
 1927 年 3 月 時調 復興 - 古型 固執 退歩（時調は復興するのか - 必ずしも古型を固執することは退歩）> 《新民》23 号（3 - 3）
 *** 1927 年 3 月 19 日、21 日「古型を固執する時は退歩す 上下」『朝鮮思想通信』285、286 号
 1927 年 3 月 朝鮮上古文化^o 研究, 朝鮮古代宗教^o 宗教學的 土俗学的研究 《東光》11 号
 1927 年 4 月 朝鮮上古文化 研究, 朝鮮古代宗教 宗教學的 土俗学的研究二 《東光》12 号
 1927 年 4 月 温突文化傳播考> 《新民》24 号（3 - 4）
 *** 1927 年 4 月 24 ~ 27 「温突文化傳播考 1 ~ 4」『朝鮮思想通信』318 ~ 321 号
 1927 年 6 月 朝鮮上古文化^o 研究, 朝鮮古代宗教^o 宗教學的 土俗学的研究三 《東光》14 号
 1927 年 7 月 朝鮮上古文化 研究, 朝鮮古代宗教 宗教的 土俗学的研究四 《東光》15 号
 1927 年 7 月 朝鮮民間説話^o 研究 - 民間説話^o 文化史的 考察(1) 《新民》27 号（3 - 7）

- 1927年8月 朝鮮上古文化 研究, 朝鮮 古代 宗教 宗教的 土俗學的研究五 《東光》16号
- 1927年8月 朝鮮民族^の 構成^と 其文化>《新民》28号(3-8)
- ***1927年8月31日~9月13日「朝鮮民族の構成と其文化1~13」『朝鮮思想通信』438~450号
- 1927年8月「温突文化伝播考」『朝鮮及朝鮮民族』第一集、朝鮮思想通信社
- 1927年9月 朝鮮民間說話^の 研究 - 民間說話^の 文化史的 考察(2) 《新民》29号(3-9)
- 1927年10月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(3) 《新民》30号(3-10)
- 1927年11月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(4) 《新民》31号(3-11)
- 1927年12月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(5) 《新民》32号(3-12)
- *1927年10月 (スンヒは再びとこへ) 《^{オリニ} (子供)》5-8
- *1928年1月 (旧曆12月大晦日) 《^{オリニ} (子供)》6-1
- 1928年1月 己未前後^の 文化相 《新民》33号(4-1)
- ***1928年1月31日~2月9日「己未前後の文化相1~9」『朝鮮思想通信』566~574号
- 1928年2月 朝鮮民間說話^の 研究 - 民間說話^の 文化史的 考察(6) 《新民》34号(4-2)
- 1928年3月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(7) 《新民》35号(4-3)
- 1928年4月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(8) 《新民》36号(4-4)
- 1928年5月 傳説 - 世界 比が 傳説(傳説自慢-世界に比のない蟻の傳説) 《別乾坤》12・13号
- *1928年5月 温突禮讚 《別乾坤》12・13号
- 1928年5月 朝鮮民間說話^の 研究 - 民間說話^の 文化史的 考察(9) 《新民》37号(4-5)
- 1928年6月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(10) 《新民》38号(4-6)
- 1928年6月、7月 朝鮮、支那民族^の 原始信仰研究 - 光明^に 関^{する} 信仰^と 太陽崇拜^の 一起因(1)、(2) 《如是》1、2
- 1928年7月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(11) 《新民》39号(4-7)
- 1928年7月「最近朝鮮社会相の変遷」『東洋』30周年記念号
- *1928年8月「朝鮮の「農家月令歌」」『東洋』第31年8月号
- *1928年9月「朝鮮の「農家月令歌」」『東洋』第31年9月号
- 1928年9月 朝鮮民間說話^の 研究 - 民間說話^の 文化史的 考察(12) 《新民》41号(4-9)
- 1928年12月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(13) 《新民》44号(4-12)
- 1929年2月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(14) 《新民》46号(5-2)
- 1929年4月 朝鮮民間說話 研究 - 民間說話 文化史的 考察(15) 《新民》48号(5-4)
- 1929年6月『朝鮮古歌謡集』刀江書院
- 1929年10月 研究雜草 讀書余録二題 《新生》2-10(創刊一周年記念大号10月号)
- 1929年11月 讀書余録 三国遺事^の 蔵印其他 《新生》2-11
- 1930年1月 處容郎伝説考 《新生》3-1
- 1930年1月 盲人考 《新民》54号(6-1)
- 1930年4月 東京 處容歌 - 安自山 答 (東京と處容歌について - 安自山に答える 《新生》3-4)
- 1930年4月「支那の巫に就いて」『民俗学』2-4
- 1930年5月 太子巫女考 《新民》58号(6-5)
- 1930年10月 讀書余録 東方奇俗 《新生》3-10(10月特大号)
- 1930年10月『朝鮮神歌遺篇』郷土研究社
- 1930年12月『朝鮮民譚集』郷土研究社
- 1931年1月 朝鮮傳説考 《新生》4-1
- 1931年8月~1932年2月 朝鮮佛教^の 国民文学 - 佛徒^の ^{のこした} 往生文学1~6 《佛教》86~92
- 1931年9月「支那及朝鮮に於ける巫の腹話術に就て」『郷土研究』5-4
- 1931年10月「巫の腹話術追記」『郷土研究』5-5
- 1931年11月「朝鮮温突考」『郷土研究』5-6
- 1931年12月「朝鮮温突考(承前)」『郷土研究』5-7

- 1932年4月「蘇塗考」『民俗学』4-4
- 1932年4月『蕙葉志譜』三文社
- * * 1932年7月「鄂博に就いて」『郷土』第2巻1号、2号、3号合冊
- 1932年8月「支那の祈子と性崇拜の資料断片」『郷土研究』6-2
- 1932年11月「太子・明道の巫称に就て」『郷土研究』6-3
- 1932年11月「厠に於ける朝鮮民俗に就いて」『ドルメン』1-11
- 1933年1月 江界正月歳事 《朝鮮民俗》1号
- 1933年1月 柱考 《朝鮮民俗》1号
- 1933年1月「朝鮮掠寡習俗に就いて」『旅と伝説』6-1
- 1933年1月「朝鮮民俗採訪余録」『郷土研究』7-1
- 1933年2月「朝鮮民俗採訪余録(二)」『郷土研究』7-2
- 1933年2月「朝鮮の率壻婚俗に就て」『史観』第3冊
- 1933年2月「部落内婚俗の研究」『郷土研究』7-2
- 1933年3月「朝鮮の掠寡習俗補遺」『旅と伝説』6-3
- 1933年4月「蘇塗考続補」『民俗学』5-4
- 1933年5月「朝鮮民家型式小考(一)」『民俗学』5-5
- 1933年6月「朝鮮のDolmenに就て」『民俗学』5-6
- 1933年7月「朝鮮民家型式小考(二)」『民俗学』5-7
- 1933年7月「仍火島の近親婚」『民俗学』5-7
- 1933年7月「朝鮮民俗採訪録」『ドルメン』2-7
- 1933年8月「長生考」『下村博士古稀記念東洋史論叢』富山房
- 1933年8月「石戟考」『民俗学』5-8
- 1933年9月「朝鮮民家型式小考(三)」『民俗学』5-9
- 1933年9月「朝鮮Dolmen考追補」『民俗学』5-9
- 1933年9月「琉球風俗」『民俗学』5-9
- 1933年10月「書評 村山智順氏の朝鮮民間信仰四部作を讀みて」『民俗学』5-10
- 1933年12月「朝鮮の累石壇と蒙古の鄂博に就て」『民俗学』5-12
- * 1934年5月「滿鮮の形勢」、石田幹之助・白鳥庫吉他監修『世界文化史体系第7巻隋唐の盛世』新光社
- 1934年5月 江界採參社^の習俗 《朝鮮民俗》2号
- 1934年7月 五大江山^の伝説神話^{と其}考究 《新東亜》33
- 1934年11月 朝鮮古代山神^の性^に就^{いて} 《震檀学報》1巻
- 1934年11月 朝鮮 (Dolmen)考 《開闢》新刊第1号
- 1934年12月 朝鮮率壻婚制考開闢 《開闢》新刊第2号
- 1935年5月「朝鮮巫覡の神歌(其一)」『青丘学叢』20号
- * * 1935年8月 文藝-民藝隨録 《三千里》6-9
- 1935年9月 支那民族^の鷄雄信仰^{と其}伝説 《震檀学報》3巻
- 1935年11月「朝鮮巫覡の神歌(其二)」『青丘学叢』22号

- 1936年2月「朝鮮巫覡の神歌(其三)」『青丘学叢』23号
- 1937年5月「朝鮮巫覡の神歌(其四)」『青丘学叢』28号
- *1936年1月 閔聯 不滅 史話 伝説 (鼠に閔聯した不滅の史話と伝説 噛んで噛んで) 《新家庭》4-1
- 1936年1月 温突 (温突はいつかにうまれたか) 《朝光》2-1
- 1936年2月 抱川松隅里 長柱 調査記 《朝光》2-2
- 1936年4月 儒教^と 朝鮮 《新東亜》54
- 1936年4月 巫覡^の 神歌 《新家庭》4-4
- 1936年4、7月 中華民族 魂 閔 信仰 学説(一)、(二)(中華民族の魂に関する信仰と学説(一)、(二))《震檀学报》4、5巻
- *1936年8月 江 山(忘れられないその川とその山) 《朝光》2-8
- 1936年10月 孟子^と 社会思想 《学燈》
- *1937年 朝鮮詩歌史綱 跋文、趙潤濟著《朝鮮詩歌史綱》東光堂書店
- 1937年5月 郷愁説問 《朝光》3-5
- *1937年9月「各方面の名士に訊く朝鮮の婦人服について」『緑旗』(緑旗連盟)2-9
- 1939年3月 ちげ (朝鮮式の背負子、背負いばしご)《博文》6(2-3)
- 1939年4月 壇君、檀君 《文章》1-3
- 1939年6月 新刊月評 震檀学报(第十巻)《文章》1-5
- 1940年9月「朝鮮甘藷伝播説」『書物同好会会報』9
- 1940年9月 巫覡^の 神歌 《文章》2-7
- 1940年10月「髓聞録」『朝鮮民俗』3号
- 1940年10月「蘇塗考訂補」『朝鮮民俗』3号
- 1941年3月 甘藷伝播考 《震檀学报》13巻
- 1941年4月 成達生筆写伝経存本(普專篇)《春秋》2-3
- 1941年4月 傳統娛樂振興問題 《三千里》13-4
- *1941年4月 設問 《朝光》7-4
- **1941年6月「農村娛樂振興問題について」『緑旗』6-6
- **1941年8月 伝來說(甘藷とじゃが芋の伝來說) 《朝光》7-8
- *1942年1月「電光の如く共栄圏の拡大、日米開戦をきいた時どう感じたかハガキ回答」『緑旗』7-1
- *1942年5月「普專図書館」『東洋之光』4-5
- 1943年1月 儒教^と 朝鮮 《半島史話^と 楽土満洲》満鮮学海社(1936年4月 儒教^と 朝鮮 《新東亜》54からの再収録)
- 1947年4月《朝鮮民族説話^の 研究》乙酉文化社
- 1947年5月 國史教育^の 基本的 諸問題 《朝鮮教育》1号
- 1947年6月 國史教育^の 基本的 諸問題 《朝鮮教育》2号
- 1947年8月 朝鮮史概論(1回)《朝鮮教育》4号
- 1947年8月 歴史学 課題(新しい歴史学の課題) 《朝鮮教育》4号
- 1947年9月 朝鮮史概論(2回)《朝鮮教育》5号
- 1947年10月 朝鮮民族史概論(3回)《朝鮮教育》6号
- 1947年10月 朝鮮民俗^の 由来^と 形成 - 民俗学的論証 《大韓人類学会報》3-2
- 1947年12月 朝鮮民族史概論(4回)《朝鮮教育》7号
- 1948年1月《朝鮮民族文化^の 研究》乙酉文化社
- 1948年2月 朝鮮民族史概論(5回)《朝鮮教育》9号
- 1948年3月 朝鮮民族史概論(6回)《朝鮮教育》10号
- 1948年6月 朝鮮民族史概論(7回)《朝鮮教育》11号

1948年7月《 民族 (我々の民族が歩んできた道) 》国際文化社
 1948年8月 朝鮮民族史概論(8回) 《朝鮮教育》12号
 1948年 花郎制度^と其^其歴史的意義 《現代文鑑》^{ソウル} 大学校出版部
 1948年12月《朝鮮民族史概論(上)》乙酉文化社
 1949年1月 朝鮮史概説 序、ソウル大國史研究室篇《朝鮮史概説》
 1949年1月 三國遺事^の社會史的考察 《学風》3号(2-1)
 1949年3月 三國遺事^の社會史的考察 《学風》4号(2-2)
 * 1949年1月 宋錫夏先生^を追慕^{する} 《民聲》30号(5-1)
 * 1949年2月 新民主主義 民族教育^の理念 《 (新教育) 》4号
 1949年6月《国史大要》乙酉文化社
 * 1948年9月 国史教育 建設^に対^{する}構想 - 新民族主義 国史教育^の提唱 《 (新教育) 》9月号
 1950年《国史講話》乙酉文化社
 1950年6月 細腰 《新天地》47号
 1950年7月《 生活(隣国の生活) 》探究堂
 * 1951年9月 民族 説話(我々の民族の説話) 《協同》31 大韓金融組合聯合会
 1954年10月 韓国満州關係史研究 序、李仁榮著《韓国満州關係史研究》乙酉文化社
 1956年5月 韓国民族^の説話 《韓国民俗学報》1
 発表年代未詳
 溫突禮讚 1928年5月 溫突禮讚 《別乾坤》12・13号
 年齢 古俗(年齢を数える古俗)

4. 新発掘資料に対する検討

今回の資料発掘を通して、孫晋泰の学問の形成過程がより具体化されたと筆者は考えている。まず、孫は1926年1月から5月にかけて《新女性》に 西伯利亞の各民族の結婚形式 を4回連載している。この論文は、1925年5月に『東洋』に発表した「朝鮮に於けるシャマニズム」の延長線上に位置するもので、朝鮮民族の起源を蒙古人種の中で、特に西伯利亞を中心とした北方に求めたことが分かる。また、東洋協会が発刊していた『東洋』に、従来知られていた「朝鮮に於けるシャマニズム」(1925年11月号)と「最近朝鮮社会相の変遷」(1928年7月号)以外にも、西伯利亞の伝説と朝鮮の古歌・童謡・婦謡・農謡などに関わる6編の論文を新たに発掘できたのは大きな成果である。これらを通して、1920年代の孫は古歌・童謡・婦謡・農謡などに大きい関心を持っていたことが明らかになった。またその関心は、早稲田第一高等学院在学中に窪田空穂(1886~1954)の授業で朝鮮詩調を「国語訳」(日本語訳)して提出したことから触発され、窪田の「慇懃」(全集3巻、1頁)に影響を受けたものである²⁵。日本人学者の勧めと指導によって、朝鮮の古歌謡に対する関心が芽生えたというのは、孫の学問を検討するにおいて重要な視点であることは言うまでもない。なぜなら、彼の学問の形成は、帝国日本の「地方学としての朝鮮研究」という枠組みの中で支えられた側面があるからである。筆者はその側面と共に、孫が朝鮮研究にどのような独自性を想定せんとしたのかを明らかにする作業が求められていると考えている。つまり、植民地朝鮮を研究する意味の普遍性と特殊性を孫の研究の中で総合的に分析し出す必要があるといえよう。また『民族』に掲載された「西伯利亞白鳥伝説の一特徴に就て」でも分かるように、孫は早くから西伯利亞の伝説と結婚形式などの民俗に大きな関心を示していた。このように、民俗文化に関する孫の学問の始まりが窪田の勧めにより形作られ、古歌謡や説話などへの関心から本格的に出発したことは特記すべきである。

また1934年朝鮮に帰国した後、日本で発表された「満鮮の形勢」の朝鮮の部分(隋・唐の高句麗征伐と新羅の統一・文化・衰亡)の執筆を担当している。また「満州」の部分の執筆は、三上次男が担当しており「渤海国の興亡とその文化」という題で書かれている。この「満鮮の形勢」が収録された『世界文化史体系第7巻』(1934年、新光社)の編集は、石田幹之助が担当しているが、孫の執筆も東洋文庫の石田の勧めによるものと思われる。「満鮮の形勢」は孫が書いた初めての朝鮮史概論として大いに注目されるので、次の章でより具体的に検討してみたい。

今回ハングル雑誌から、新たに多くの論文を発掘することができた。孫が児童に関心を持っていたことは、かつてより知られていたが、今回の調査により、当時の児童向けの雑誌の中心的な位置をしめていた《^{オリニ} (子供) 》に3回投稿したことが明らかになった。従来の研究では孫の学問の初期におけ

る創作詩と童詩と随筆などは、ほとんど検討されず、その目録は不完全なものにとどまっていたが、今回その具体的な書誌を明らかにすることができた。また、従来の書誌で発表年代未詳とされていた 温突禮讚 は、今回の発掘で《別乾坤》(12・13号、1928年5月)に掲載されたものであることが分かった。また特筆すべきは、1930年代半ば以降、帝国日本の総力戦体制に「協力」的な朝鮮人による雑誌だといわれる《朝光》、《三千里》、《文章》などでも幾つかの論文を発掘できたことだ。また、《朝光》、《三千里》には度々孫を取り上げ、彼の学問を高く評価している。それから、同様に内鮮一体、日鮮融和の推進を目的とした在朝日本人の組織「緑旗連盟」の機関紙『緑旗』から三つの資料を発掘できた。特に孫の「新民族主義」の成立の性格の一面を示してくれると判断される「農村娯楽振興問題について」(6-6)と「電光の如く共栄圏の拡大、日米開戦をきいた時どう感じたか」(7-1)は大いに注目される。これについては、章を改めて後ほど具体的に検討することにしたい。

また従来の研究では、『朝鮮思想通信』には「朝鮮民族の構成と其文化」のみが翻訳されているとされていたが、今回それ以外にも新たに「古型を固執する時は退歩す」、「温突文化傳播考」、「己未前後の文化相」なども翻訳されていることが分かった。『朝鮮思想通信』(朝鮮思想通信社)は1926年5月15日加藤韓堂により京城で発行されたもので、1929年11月15日(第1104号)からは『朝鮮通信』(朝鮮通信社)と改称され1933年12月26日(第2325号)まで刊行された日刊紙である。孫の研究は当時の在朝日本人にも注目される内容であったと推測される。

次に、解放後に発表された論文の中で新たに発掘されたものを検討してみたい。従来その書誌が曖昧とされてきた《朝鮮教育》に発表された論文の書誌を明らかに把握できた。また、《(新教育)》に 国史教育 建設 対^{する} 構想 - 新民族主義 国史教育^の 提唱 と 新民主主義 民族教育^の 理念 という論文を新たに発掘できた。この二つの論文には所謂「新民族主義」に関する彼の考えがよく記されており、植民地期に書かれた論文との対照作業を通じた緻密な分析が求められている。

また筆者は、孫晋泰が参加した多くの座談会の資料も発掘できた。それは次の通りである。

* 1936年6月 三専門學校 四教授 三新聞社 學藝部長 文藝政策會議 《三千里》8-6 (出席者) 梨花専門學校金尙鎔 / 普成専門學校俞鎮午 / 延禧専門學校鄭寅燮 / 普成専門學校 孫晋泰 / 東亞日報徐恒錫 / 朝鮮日報洪起文 / 朝鮮中央日報金復鎮 / 本社金東煥・朴相羲。

* 1937年7月 鳳山 座談会(鳳山仮面劇座談会) 《朝光》3-7、孫晋泰等16名。

* 1937年8月「朝鮮カラーを語る(座談会)」『朝鮮』267号(来賓)秋葉隆 / 玄櫛 / 宋錫夏 / 孫晋泰 / 田中徳太郎 / 金基衍 / 李基世(主催側) 稲川鉄道局旅客係長 / 島田鉄道書記 / 村山本府囑託 / 倉元本誌記者。

* 1938年1月「鮮満の正月民俗を語る座談会」『朝鮮』272号(出席者) 稲葉岩吉 / 今村鞆 / 烏山喜一 / 玄櫛 / 孫晋泰 / 秋葉隆 / 朱鍾宜 / 吳晴(主催側) 村山智順 / 倉元弘。

* 1941年9月「座談会 時局と読書」『新時代』1-9、孫晋泰等6名。

* 1948年10月15~19日 民主民族教育^の 道 :本社主催 教育座談会(1)~(4) 《ソウル新聞》安浩相、孫晋泰等7名。

以上の座談会の記録と孫の発言は、他の論文との対照により厳密に分析しなければならない。座談会の記録と新聞記事などに関する詳しい検討は今後の課題としたい。また、孫の掲載した新聞及び週刊誌の記事の書誌は次の通りである。

1931年7月19日 處容傳説 東京 就 , 金在喆氏 駁論 答 (再び處容傳説と東京に就いて、金在喆氏の駁論に答える) [第1回] 《東亜日報》

1931年7月22日 處容傳説 東京 就 , 金在喆氏 駁論 答 (再び處容傳説と東京に就いて、金在喆氏の駁論に答える) [第2回] 《東亜日報》

1931年7月23日 處容傳説 東京 就 , 金在喆氏 駁論 答 (再び處容傳説と東京に就いて、金在喆氏の駁論に答える) [第3回] 《東亜日報》

1934年7月31日「天下大將軍の話(1)」『大阪毎日新聞』朝鮮版

1934年8月1日「天下大將軍の話(2)」『大阪毎日新聞』朝鮮版

1934年10月10日 朝鮮心 朝鮮色 朝鮮心^と 朝鮮^の 民俗[第1回] 《東亜日報》

1934年10月11日 朝鮮心 朝鮮色 朝鮮心 朝鮮 民俗[第2回] 《東亜日報》

1934年10月12日 朝鮮心 朝鮮色 朝鮮心 朝鮮 民俗[第3回] 《東亜日報》

1934年10月14日 朝鮮心 朝鮮色 朝鮮心 朝鮮 民俗[第4回] 《東亜日報》

- 1934年10月16日 朝鮮心 朝鮮色 朝鮮心 朝鮮 民俗[第5回] 《東亜日報》
 1934年10月17日 朝鮮心 朝鮮色 朝鮮心 朝鮮 民俗[第6回] 《東亜日報》
 1934年10月19日 朝鮮心 朝鮮色 朝鮮心 朝鮮 民俗[第7回] 《東亜日報》
 1935年1月10日 傳説 (七)馬山 (伝説に現れた豚の話(七)馬山の石島と金豚) 《東亜日報》
 1935年9月19日 慶州[第1回] 《東亜日報》
 1935年9月20日 慶州[第2回] 《東亜日報》
 1935年9月22日 慶州[第3回] 《東亜日報》
 1935年9月24日 慶州[第4回] 《東亜日報》
 1935年9月27日 慶州[第5回] 《東亜日報》
 1935年9月28日 慶州[第6回] 《東亜日報》
 1936年1月1日 解釋 ; 高句麗 民族思想(昔の自慢、新解釈; 高句麗の民族思想) 《東亜日報》
 * * 1937年7月15日 火田民 現代女性 「 」、 山中
 別世界生活様式[山] (火田民のゴム靴は現代女性の「ピアノ」、みてきた山中の別世界
 の生活様式[その山その海]) 《東亜日報》
 1937年9月2日 讀書餘響 ; 新秋燈下 書籍 (一)
 民俗學徒 (讀書余響; 新秋灯下で読ませたい書籍(一)民俗学徒たちに) 《東亜日報》
 1939年1月1日 自彊不息學問 精進 - 實用實學 先驅者 (自彊不息學問に精進 - 実用実学
 の先驅者達) 《東亜日報》
 1939年11月5日 生活哲學 - 가 (私の生活哲学 - 言葉に慎むこ
 と) 《東亜日報》
 1947年11月9日 民俗と民族 - 民俗文化の民族的性格に關連して 《京郷新聞》
 1948年11月12日 民族文化学 《ソウル新聞》
 1949年11月11日、12日 学校制度論 - 国会議員 諸公に告ぐ (1)~(2) 《ソウル新聞》
 1949年11月16日 学校制度 再論 (学校制度を再論する) 《ソウル新聞》
 1949年11月28日 2千年間 伝統 (2千年間の伝統を生かそう) 《週間ソウル》

5. 朝鮮古代史に対する認識の変化

今回の新しい資料の発掘により、孫の業績の全貌が明らかになったが、特に注目すべきは「満鮮の形勢」(石田幹之助・白鳥庫吉他監修『世界文化史体系第7巻隋唐の盛世』新光社、1934年5月)という論文である。従来の研究では、孫は解放前には民俗学研究に集中し、解放後には歴史学研究に集中したとされてきた。実際に、これまで知られた解放前の孫の著作は、そのほとんどが広義の民俗学に関わるものと言っても過言ではない。歴史関連の論文と思われるものもあるが、その内容はあくまでも民俗学的視点の上で書かれたものといえる。

1934年の春、朝鮮に帰国した孫は、延禧専門学校で非常勤を勤め、9月からは普成専門学校に在職することとなり、文明史・東洋史・歴史などを担当した。1930年代における朝鮮の専門学校には民俗学という教科はなく、孫は歴史学という枠組みの中で、民俗学的知識を取り入れて教えていたと推定される。ここに推定という単語を使わざるを得なかった理由は、残念ながら孫は帰国以降、講義録はもちろん、これといった論文をほとんど発表していないからである。日本での前向きな活躍に比べると、その量は圧倒的に少なくなっており、発表した論文の多くも日本語で発表した以前のものを朝鮮語で直したり補充したもの、朝鮮巫覡の神歌を採録したもの、大衆向けのエッセイがほとんどである。しかし、1934年帰国以来、解放まで10年ほど朝鮮で朝鮮の学生を相手に歴史学を教えた孫は、朝鮮史に関わる論文をいくつか発表していても不思議ではないが、従来の研究では知られていなかった。

今回の発掘でも解放前にハングルで発表された朝鮮の歴史概論に関わる論考を探ることができなかった。それで筆者は、1930年代に孫が東亜日報に度々民俗学に関わる大衆向けの記事を書いたことに着目して、東亜日報における孫に関わる記事を調べてみた。それにより、孫は2回にかけて、東亜日報主催の講座に参加したことを知ることができた。初めは1935年8月2日に東亜日報の夏季巡迴講座に講演者として参加している。その講演内容については詳しく書かれていないので、具体的に知ることはできないが、民俗学に関わるものではなかったかと推定される。その後、東亜日報は「第1回朝鮮歴史講座」を企画、1935年11月7日付けでそれを公表した。11月9日の記事によると、講師は3人で「上

古史」は鄭寅普が、「人物中心にみた韓末外交関係」は李瑄根が、「朝鮮史概説」は孫晋泰が夫々担当することになっていた。解放後に発表された 朝鮮史概論 と類似する題での発表が既に 1935 年に予定されていたが、11 月 12 日の記事によると、「第 1 回朝鮮歴史講座」は京畿道警察により禁止された。孫は歴史講座の講演者として選ばれ、その準備をしていたと思われるが、当局の圧力で突然中断される形となった。しかし、「朝鮮史概説」に関する孫の基本的な構想はこの時期から具体的に始まったのではないかと思われる。ただし、その内容が解放後に書かれた「新民族主義史観」の言説と同じ立場で構想されたと主張することは、まだまだ早いのではないかと筆者は考えている。

そこで今回発掘した「満鮮の形勢」という朝鮮古代の三国時代に関する概論は大変興味深い。孫が朝鮮に帰国したのは 1934 年の春で、この論文が収められた『世界文化史大系第 7 巻』が出版されたのは同年の 5 月である。そこで発表時期から考えると、この論文は孫が朝鮮に帰る直前、またはその以前に書かれたものと思われる。検討すべきは、この論文と解放後に書かれた孫の朝鮮史概論書とを比較することであり、それは彼の歴史認識の展開及びその実体を明らかにするにおいても見逃してはいけなないと考えられる。惜しくも、1934 年の論文は、三国時代に限定して書かれたものであり、『世界文化史大系』という編集方針の枠組みの中で平面的に書かれたという限界はあるかもしれない。しかし、少なくともそれは、当時における孫の三国時代の認識の一端を垣間見ることが出来る唯一の公表された資料といえる。

孫は解放後に新しい国民国家建設が急速に進行される中で、持病にもめげず、「新民族主義史学」の基つき、歴史教育の重要性を訴えることとなり、新しい時代に沿う歴史概論書の執筆に着手し始めた²⁶。1947 年 8 月、《朝鮮教育 4 号》に発表された 朝鮮史概論(1 回) は、3 回(《朝鮮教育 6 号》)からは 朝鮮民族史概論 という題に改められ、8 回に渡って連載された。それを単行本にまとめたのが、1948 年 12 月に刊行された《朝鮮民族史概論(上)》(乙酉文化社)である。それから新羅統一時代までの記述にとどまっている《朝鮮民族史概論(上)》を時代の要請に応える形で、大衆向けに分かりやすく書き直す一方で、1920 年代初めまでの近代史を追加したのが《国史大要》(乙酉文化社、1949 年 6 月)である。

では、まず検証しなければならないのは、「満鮮の形勢」(1934 年 5 月)と《朝鮮民族史概論(上)》(乙酉文化社、1948 年 12 月)及び《国史大要》(乙酉文化社、1949 年 6 月)の三国時代の記述との関わりである。結論から言えば、筆者の分析の結果、《朝鮮民族史概論(上)》の三国時代の記述は「満鮮の形勢」を下書きにして書かれたものと思われる。というのは、表 1 でも分かるように、三つのテキストには類似の文句が際立っているからである。

表 1 .

「満鮮の形勢」 (1934 年 5 月)	《朝鮮民族史概論(上)》 (1948 年 12 月)	《国史大要》 (1949 年 6 月)
〔隋の〕陸軍は、わづかに臨渝関(山海関の西の永平)を出づるや、出水のため食糧続かず、その上兵卒は疾疫に遇ったので、やむなく引返し、周羅喉の率いる水軍は山東の東萊より海路平壤に向ったが、暴風のため戦艦の大部分を失ひ、これまたなにらの功なくして返った。六月に兵を出し、九月にその師還るや、死者十中の八九を算したといふから(104 頁)	その陸軍は、わづかに臨渝関(山海関の西の永平)を出づるや、出水のため食糧続かず、兵卒は疾疫により多数の死者を出し、やむなく引返し、水軍は山東半島の東萊より平壤に向ったが、暴風のため戦艦の大部分を失ひ、これまたなにらの功なくして返った。六月に出兵し、九月にその師還るや、高句麗と一戦も交さず、死者十中の八九を算したといふから(153~154 頁、日本語訳は引用者による)。	隋の陸軍は、臨渝関(山海関の西の永平)を出づるや、出水のため食糧続かず、その上兵卒は疾疫に多く死に、海軍は暴風のため戦艦の大部分を失ひ、これまたなにらの所得なくして九月に返った。死者十中の八九を算したといふ(68 頁、日本語訳は引用者による)。

しかし、客観的な事実の記述はほとんど一致しているにもかかわらず、「満鮮の形勢」と《朝鮮民族史概論(上)》における歴史叙述のやり方は大きな違いが見られるのも事実である。それを簡略にまとめると表 2 のようになる。

表 2 .

	「満鮮の形勢」 (1934年5月)	《朝鮮民族史概論(上)》(1948年12月) 第6章・三国の対外民族闘争と新羅の統一
目次	隋の高句麗征伐 唐太宗の高句麗征伐 新羅の一統 新羅の文化 新羅の衰亡	第1節． 三国の対外民族闘争とその意義 第2節． 新羅と日本民族との闘争 第3節． 高句麗と隋との闘争 第4節． 高句麗と唐との闘争 第5節． 百濟王朝の敗亡とその原因の検討 第6節． 高句麗王朝の敗亡とその原因の検討 第7節． 新羅の統一と民族の決定 第8節． 朝鮮民族と中華民族との永久的な親善 第7章． 新羅の貴族国家的な隆盛とその衰亡
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実証主義的な記述 ・ 日本と友好、「支那」と不和 ・ 支配貴族中心の記述 ・ 隋と唐からみた三国史 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 解釈主義・教訓主義・新民族主義的な記述 ・ 日本(倭)と敵対、「中華民族」と親善 ・ 民衆(国民)中心の記述 ・ 三国の民族史中心 ・ 日本帝国の奴僕学者への批判

表 2 のように、その形式は類似しているものの、その内容は大きな偏差を示していることがわかる。まず、目次から検討してみたい。「満鮮の形勢」が隋・唐を中心に据えており、辺境として三国を扱っているのに対して、《朝鮮民族史概論(上)》は朝鮮民族史に中心を据えており、三国と隋・唐とを対等に取り扱っている。それは前者が隋・唐側からの高句麗征伐を扱っているのに対して、後者が高句麗と隋・唐との闘争を対等に扱う題をつけていることから容易に知ることができる。また、前者が唐の高句麗征伐と新羅の統一を平面的に記述しているのに対して、後者は三国の対外民族闘争の立場からダイナミックに記述しており、最後に「中華」民族(前者では「支那」、後者では「中華」民族という用語の使用からも分かるように、孫の中国観は大きく変わっている)との永久的な親善関係を新たに付け加えていることが分かる。

次に、両者の内容を具体的に対照・分析してみることとする。前者が実証主義史学に基づいて、資料を中心として事実を平面的に叙述されているのに対して、後者で孫は、歴史の「経過に対して分かる」必要があり、またその原因と結果に対しても正確に批判しなければならない。この二つ(高句麗と百濟)王朝の興亡は現在と将来の我が民族生活の上において、至大なる教訓を与えてくれるからである(166頁)と主張している。このように、後者は従来孫が志向していた実証主義史学から離れて、いわゆる「新民族主義史学」に基づき、歴史から原因と教訓を得るための積極的な解釈主義の立場に立って「民族史的に観察」(147頁)していることがわかる。

1919年の3.1独立運動に参加したこともあり、民族主義に目覚めた青年であった孫は、1920年日本に渡り、早稲田大学で津田左右吉らを初めとした近代実証史学の洗礼を受けることになる。学問を通して、感情的な民族主義から離れて、孫は次第に近代学問による現実的な問題解決に関心を持つことになった。そこで感情解放運動を越え、1920年代初めからは「学問は現実政治を超越できるという信念」²⁷を持つようになる。1934年に発表された「満鮮の形勢」は、このような実証主義史学の立場に基づいて書かれているということは言うまでもない。しかし解放後、孫は「新民族主義史学」に立脚して、民族と国民(民衆)を中心とした歴史叙述を試みているが、それは従来の支配権力側中心の歴史叙述とは大きく異なるものであった。後者では「民族団結」(152頁)「民族としての団結」(168頁)「国民の団結」(159頁、171～172頁の中で5回使用)「国民に団結力」(168頁)「国民的団結」(172頁、173頁、176頁)「国民の精神的団結」(175頁)「同一民族の感情と意識」(180頁)「強力な民族的自衛対策」(186頁)の重要性を繰り返して強調している。そこで孫は、貴族と国民との距離が離れて貴族国家を繰り返し批判して、「民族団結は無階級の平等社会だけに存在しており、それが求められていることを明白に知る必要がある」(152頁)と強調している。このように解放後における孫の「新民族主義史学」は、貴族社会を否定し、「無階級の平等社会」を単純化して理想としているために、階級発生以前の上古史を無批判的に肯定しているフシがある。

また、二つの論文を比較するにおいて見逃してはならないのは、孫における「中国観」と「日本観」

との転向である。前者で孫は、唐の征伐に対する高句麗〔大将乙支文徳〕の活躍に「輝かしい誇りの一つ」(107頁)と評価し、「朝鮮人の支那に対するかかる態度〔自尊人〕は独り三国に限らず、以後近世に至るまで大体において同様であった」(115頁)と中国との友好の歴史について否定的に評価している。このように、前者での否定的な評価とは異なり、後者では「朝鮮民族と中華民族との永久的な親善」という節を新たにつくって、中華民族との永久的な友好を繰り返し強調しているのである。例えば、「漢民族と朝鮮民族は平和を持続してきた」(179頁)、「漢人は重大問題に際にも脅威と賠償と生存者の送還を以って、妥結する寛大な政策を取り、報復的な殺傷は行なわなかった」(181頁)、「ただ高句麗と漢民族の間だけは決して親和することは出来なかったが、それは漢民族の侵攻に起因するよりは、かえって高句麗国家の積極的・好戦的発展政策に起因する」(470頁)とその記述が逆転している。このような急激な中国観の変化は、帝国日本と共に戦った中国を高く評価する解放空間の民族主義史観の考え方と連動していることは言うまでもない。

一方、「日本観」においても両者の主張には大きな転向がある。前者で新羅は三国を統一した後、「日本とも使節を交換して隣好を厚うした」(115頁)と主張しているが、後者では「新羅と日本民族との闘争」という節を新たに設け、侵略的な日本に対する批判を繰り返している。孫は後者で日本に関わる朝鮮の伝説などを取り上げて、「新羅国民の日本民族に対する敵愾心と悲憤の心情」(150頁)を指摘し、「日本の執拗な侵略性を明らかに物語っている」(152頁)と強調している。また「中華民族と我々は新羅統一以来一千三百年間、親善が継続され、二つの民族が平和愛好的であったことは証明されたが、周囲民族の中で、我々が放心することのできない、最も陰険な好戦民族が日本民族であることを我々は不断に警戒しなければならない」(152頁)として、中華民族は善玉、日本民族は悪玉という極端な二分法的な思考に陥っている。このように孫によると、新羅統一以来の朝鮮民族は、中華民族とは親善関係を保ってきたが、好戦民族である日本民族は続けて警戒すべき対象である。しかし、その認識は解放前に書かれた前者の論文とはまったく異なるものであった。

孫の日本批判はそれにとどまらず、帝国日本を支えた御用学者にも向けられている。「往年の日本帝国主義はこの偉大で厳然なる事実を隠蔽するために卑怯に、我々の歴史的論述を弾圧し、彼らの奴僕学者らに朝鮮・中華両民族の離間と朝鮮民族の自尊心の抹殺をはかった。朝鮮は衛満以来二千数百年間、ほとんど中国に服属して自主独立できる能力のない民族だと宣伝して、さらには高句麗を我々とは異民族だとして、朝鮮史から抜け出し、通古斯民族である高句麗が朝鮮民族の北半の地を支配したという怪説を発した者まであらわれた」(471頁)と「満鮮史学」のイデオロギーを鋭く批判している。しかし、このような批判は、解放前の論文では見当たらない。したがって、解放後の言説を取り上げて、解放前の孫の認識を高く評価する従来の研究は見直さなければならないであろう。以上のように、前者と後者の三国史概論の内容を比較分析してみたが、両者の主張には大きな違いが際立っていることが分かった。

6. 「新民族主義史学」の形成とその展開

では、このような違いはどこから起因するかを改めて問わなければならない。解放後の孫の考えは「新民族主義史学」に基づいているが、それはどのように創られていったのかを検討してみたい。まず、孫は《朝鮮民族史概論(上)》の自序にて新民族主義の見地からこの民族史を書いたと前提してから「私が新民族主義朝鮮史の著述を企図したのは、所謂太平洋戦争が勃発した時からである。同学数友と共に時々密会してこれに関する理論を討議して体系を構想した」(全集1巻、282頁)と新民族主義史学の成立の始まりを述べている。孫の教え子・孫寶基は、「後ほど聴いた話によると、南滄、陶南(趙潤濟先生の雅号)、鶴山[李仁榮の雅号]の3人の方が日帝[日本帝国または日本帝国主義]の監視が酷い中、研究室を中心に我々の民族の歴史、文学、人類学の研究を行ない、東山学派と名づけ、新民族主義の本山になった」²⁸と回想している。このことから、同学数友は、趙潤濟(1904~1976)と李仁榮(1911~?)であることが分かる。解放後に、趙潤濟は次のように回想している。

私は過去の自分の研究生生活を改めて反省し〔中略〕普成専門学校の図書館を訪ねたのは、静かで且つ孫晋泰氏のような良い学問の友がいたからである。前述したように私は、自分の国文学研究の動機が民族精神の鼓吹と民族独立運動の一翼にあったと述べたが、実際に私の研究はそのような精神を辿ってきたのだろうか。〔中略〕私はこの問題を以って何回も学友孫晋泰氏と、間もなく同研究室に入ってきた学友李仁榮氏と議論してみた。我々は皆自分の学問に対して同じ煩悶を感じていた。〔中略〕過去の我々の学問は目的のない文字の戯弄であり〔中略〕ある本の長さは何寸であり幅が何寸で何頁一行、何字何行になっているということを経々と述べることも一種の道楽であり、人生問題の解決のカギとはなれない。〔中略〕民族が存亡の危機に直面しており、したがって民族が歩

んでいく道を明示できることを希望し、これを急がなければならない時期であるだけに我々の学問において、民族という問題を離れては考えることはできなくなった。それで我々は全ての学問研究において民族史観的な立場を捨てては本当の我々の学問になることはできないと深く悟り、また堅く信じた。民族史観、これは我々の学問研究の立場である²⁹。

孫晋泰らは根本的に学問を反省し、民族史観の立場から民族の危機を解決できる学風を創り出そうとしたと趙は主張している。陶南年譜³⁰によると、趙が孫の周旋で普専図書館の研究室で勉学した時期は、1939年4月から1940年3月までである³¹。孫の「新民族主義史学」の模索は1939年4月以降に展開されたといえる。ただし、従来の研究では趙の言を過信したあまり、1939年以降の孫の学問を、民族的危機を解決するための実践的な学問だと規定してきた。例えば、孫寶基は「先生の研究は日帝時代に行われており、それは新民族主義史観の上でまとめられた」³²と主張しているが、そのような観点が従来の研究では一般的であった。しかし、1939年以降の孫の学問の性格を検証するためには、趙の主張を無条件的に受け入れるのではなく、1939年以降から解放まで書かれた孫の論考を発掘して厳密に検討する方が妥当であるように思われる。南根祐はこのような問題意識に基づいて、次の論文を検討している³³。

1939年：^{ちげ}、壇君、檀君、新刊月評 震檀学報（第十巻）

1940年：「朝鮮甘藷伝播説」、巫覡^の神歌、「髓聞録」、「蘇塗考訂補」

1941年：甘藷伝播考、成達生筆写伝経存本（普専篇）、傳統娛樂振興問題、「農村娛樂振興問題について」、伝來說（甘藷とじゃが芋の伝來說）

今回、筆者が新たに発掘した設問（《朝光》7-4、1941年4月）、「電光の如く共栄圏の拡大、日米開戦をきいた時どう感じたかハガキ回答」（『緑旗』7-1、1942年1月）、「普専図書館」（『東洋之光』4-5、1942年5月）を除いたその大半を検討してから南は、「一番目に、孫晋泰の‘新民族主義’史観は、民族的現実を打開せんとする積極的な実践性を帯びた史観だとされてきた従来の通説を立証できる孫の言説を探すことができなかった。むしろ郷土娛樂‘振興’論のような当時の反‘民族主義的現実’に迎合するような発言が窺える。二番目に、孫は‘植民主義的朝鮮史観に正面から闘いながらその虚偽性・虚構性を暴露した’という通説を裏付けるような言説を探すことが出来ず、むしろ植民主義的朝鮮文化論や‘内鮮文化の交流’論に同調するような発言が窺える」³⁴と結論づけている。筆者は南の研究の実証性を高く評価しているが、南は従来の研究史に批判的なあまり、植民地における孫の内面世界を見落とししかねない側面があると考えている。

確かに南が指摘するように、壇君、檀君は檀君をめぐるポリティックスを度外視して、趙が批判したように、「壇」か「檀」かの版本の問題にこだわっており、現実から目を背けた文献考証的論文に終始している。このような姿勢は「朝鮮甘藷伝播説」、「蘇塗考訂補」、甘藷伝播考、成達生筆写伝経存本（普専篇）、伝來說（甘藷とじゃが芋の伝來說）などにも一貫している。しかし、ある思想主体の考えが急速に変わるのみならず、漸進的に変わることもあると前提すれば、1939年以降の論文における微妙な言説の変化に留意して、その展開を捉える必要があると思われる。前述の通り、孫は緑旗連盟の機関紙『緑旗』に三つの文書を寄せている。緑旗連盟は天皇を中心に全ての民族、全ての文化を総合統一・生成発展させてそれによる世界人類の楽土を建設せんとする国家主義的色彩の強い国柱会の思想運動団体であった³⁵。『緑旗』に掲載された、「新民族主義史学」の性格を示していると思われる「農村娛樂振興問題について」（6-6、1941年6月）と「電光の如く共栄圏の拡大、日米開戦をきいた時どう感じたか」（7-1、1942年1月）は大いに注目される。前者は2ヶ月前に《三千里》に傳統娛樂振興問題という題で発表したものを、日本語に改稿したものである。その冒頭で孫は自分の民俗学を我々の生活に生かせるべく深く考慮しなかったが、緑旗聯盟では早くからこれに注意してきたことに敬服の念を述べた後、「今日の非常時局に当って、始めて農民生活に就ての新体制編成の必要に迫られ、旧体制以前の体制、いはば、旧々体制の中から総力体制を見出そうとして、ここに傳統娛樂に注

意するようになった」³⁶と主張している。孫は、農村娯楽振興の長所として「第一に、これは最も安値な農民健康運動であり、第二は、互助・協同精神の涵養であり、第三は、情緒に潤ひを与へ、第四は、愛郷心・愛土新を強くし、第五は、官民間の感情の融和」を挙げている³⁷。このような孫の郷土娯楽論は、非常時局の娯楽政策論に応えたものである。

帝国日本の非常時局に当り、孫は従来の実証主義から離れ、実践的な民俗学への必要性に共感している。総力戦体制の中で実践的な民俗学を通し、新体制編成の必要性を訴える孫の言説からは、「民族」のための学問の本質を再検討すると共に、「民族」主体の範囲と性格などを改めて問いたださなければならない。なぜなら、それには「民族協和」「五族協和」を唱えた「アジア主義」へ繋がる危険性が多分にあったからである。実際に孫は、1942年「電光の如く共栄圏の拡大、日米開戦をきいた時どう感じたか」で「壮快だ！東亜共栄圏を、東はハワイ、西はスエズ、南はオーストラリアまで延長せよ。而して亜細亜諸民族を白人の奴隷より解放せよ、と叫びました。宣戦を聞くと共に、不思議にも或る偉大なる力を感じ、電光の如く共栄圏がズンズン拡大されてゆくには、今更ながら驚嘆の感に打たれました」（『緑旗』7-1、38～39頁）と戦争を肯定している。総力戦体制の中で、「民族」概念が再規定される「民族」の危機的状況で、太平洋戦争に「驚嘆の感」を覚えた孫の言説は大いに注目される。

「東亜共栄圏」に共鳴していた孫の所謂「新民族主義史観」の成立は、根本的に再検討しなければならない。たとえ、それが朝鮮民族の危機状況から民族を救おうとした心境から出た苦悩の産物であり、それが植民地内部の朝鮮人の固有性を主張しようとしたものであったとしても、「新民族主義史観」は帝国の統合論理への編入を余儀なくさせられたものであったといえよう。というのは、孫の「新民族主義史観」の成立は、帝国及び国民国家の論理を根本から否定したのではなく、総力戦体制の非常事態を受け入れたうえで、ローカルな地位に満足し、それにとどまった地点から始まっていたからである。1930年代実証的な学問を目指していた孫は、戦時に入り「東亜共栄圏」という帝国の膨張から刺激を受けて「実践的」民俗学を唱え、「新民族主義史観」を立ち上げようとしたが、それは帝国の論理に編入されやすい性格のものであった。

このように、1919年の3.1独立運動に参加するなど民族主義に目覚めていた孫は、1920年日本に渡り、早稲田大学で津田左右吉らを初めとした近代実証史学の洗礼を受けるようになり、1920年代初めから「学問は現実政治を超越できるという信念」（新刊月評 震檀学報第十巻《文章》1-5、1939年）を持っていた。孫晋泰は、総力戦体制の時期に至り「実践力」を伴う学問を本格的に試みたのは、興味深い。また「新民族主義史観」に基づいた実践的な民俗学の性格は、総力戦体制との関連下で再検討しなければならない。いわば、孫晋泰ら「東山学派」の「民族史観」は、「民族」が存亡の危機に直面して現実の解決を目的としたものであり、それは「帝国の論理」に吸収されやすい危うい「実践力」を伴うものであった。なぜなら、その「実践力」は帝国の膨張と拡大という磁場の中に収斂されやすいものであり、その磁場の中で「新民族主義史学」を唱えることは、総力戦体制の中で利用されやすい性格のものであった。

これまで新たに発掘した孫の歴史資料の検討を通して、孫の朝鮮史認識の展開を考察してみた。その結果、解放前と解放後の三国時代認識には大きな差異が存在することが明らかになった。1934年に書かれた「満鮮の形勢」が実証主義史学に立脚して平面的に事実を客観化したのに対して、解放後「新民族主義史学」に立脚して書かれた《朝鮮民族史概論（上）》では教訓主義・解釈主義・民族主義的な視点から国民（民族）中心のナショナル・ヒストリー（国史）を創り出そうとしていた。また、見逃してはいけないことは、実証主義史学から「新民族主義史学」への変化の中であらわれる、太平洋戦争の時期を前後にした微妙な言説の変化である。総力戦体制の真っ只中で孫は、従来の実証主義を超えた「純粹」学問から民族の危機を解決できる「民族」史観を目指すようになる。しかし、そこでの民族概念は解放後の「単一民族」的な民族概念のみならず、帝国日本の「五族協和」「多民族」的な民族概念まで拡張できる側面を持っていたのも否定できないのではなからうか。そして、帝国が表面上なくなった解放後において孫が創り上げたと言われる「新民族主義史学」は、「帝国から国民国家へ」の論理へと再編されていくのであるが、その展開は表面上において、あまりにもスムーズに移行されたようにも思われる。それは解放後の韓国における新たな国民国家の形成は、総力戦体制の延長線上で機能した側面があるからではないだろうか。それをバックアップしたのが冷戦構造であったことは言うまでもない。本稿で孫晋泰の学問の意味を改めて問うことは、その全般的な究明のための土台作りにもなれると筆者は考えており、それに関するより具体的な考察は今後の課題である。

- 1 従来孫晋泰の末年については、詳しい情報がなく、その消息を知ることが出来なかった。孫は1950年の朝鮮戦争時に北に連れ去られた後、依然と消息が不明ではあるが、北から南にきた申敬完と朴ビョンホアの証言によると、孫は北の体制から疎外され、持病で苦勞しながら60年代半ば死亡したとされる(崔光植 孫晋泰の生涯と学問活動、韓国歴史民俗学会編《南滄 孫晋泰の歴史民俗学研究》民俗苑、2003年、32~33頁。李泰昊《 》、1991年(青柳純一訳『鴨綠江の冬』社会評論社、1993年)を参照)。また1950年には「新民族主義」を唱えた安在鴻、李仁榮らも北に連れ去られ、南における「新民族主義史観」の伝統は途絶えたと言われている。以下ハンゲルの原本探索が容易に進められるように、ハンゲルの個別論文は原文で表記してからそれを直訳し、同様に単行本は《 》に、日本語の個別論文は「 」、単行本は『 』に使い分け、便宜を図ったことを断っておきたい。
- 2 『民俗学』への発表論文(2-4「支那の巫に就いて」、4-4「蘇塗考」、5-4「蘇塗考続補」、5-5、7、9「朝鮮民家型式小考(一)(二)(三)」、5-6「朝鮮のDolmenに就て」、5-7「仍火島の近親婚」、5-8「石戦考」、5-9「朝鮮Dolmen考追補」、5-9「琉球風俗」、5-10「村山智順氏の朝鮮民間信仰四部作を読みて」、5-12「朝鮮の累石壇と蒙古の鄂博に就て」)、『郷土研究』への発表論文(5-4「支那及朝鮮に於ける巫の腹話術に就て」、5-5「巫の腹話術追記」、5-6、7「朝鮮温突考、承前」、6-2「支那の祈子と性崇拜の資料断片」、6-3「太子・明道の巫称に就て」、7-1、2「朝鮮民俗探訪余録、(二)」、7-2「部落内婚俗の研究」)。
- 3 孫は1932年から2年間、帝国学士院の学術研究奨励金を受けているが、奨励金の受け取りには、学士院の会員であった東洋文庫の白鳥庫吉の後援があったように思われる。1932年度民俗学関係の研究5件の中の一つであり(『民俗学』4-4、1932年4月号、110頁)孫の研究課題は「朝鮮土俗資料の蒐集並に其研究」であった。ちなみに、1932年の帝国学士院の奨励を受けた朝鮮関係の研究課題の七つの中の一つに当たる(『青丘学叢』第十二号、1933年5月、201頁)。朝鮮人の中では唯一であるが、1934、35年には金斗憲が「朝鮮の家族制度の研究」という課題で奨励金を受けている。
- 4 詳しくは「民俗学談話会(孫晋泰氏を囲む)の主旨」、『郷土研究』5-4、20頁と「民俗学談話会記事」、『郷土研究』5-5、86頁を参照。
- 5 解放後の孫の「新民族主義史観」に関する具体的な内容は、坂井の論文を参照。坂井俊樹『日本の教育史学』第41集、1998年、後に『現代韓国における歴史教育の成立と葛藤』(御茶の水書房、2003年)に収まる。
- 6 鶴園裕「孫晋泰」、木村誠他編『朝鮮人物事典』大和書房、1995年、312頁。
- 7 筆者はこれまで植民地期の孫晋泰に関わる二つの論文を発表してきた。次の拙稿を参考にして頂きたい。拙稿「実践力をともなう民俗学のゆくえ」、『近代日本における宗教とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究 科学研究費補助金研究成果報告書』、2006年3月。拙稿「植民地郷土を研究することの意味 - 朝鮮学、朝鮮民俗学、孫晋泰の再考」、大阪大学『日本学報』25号、2006年3月。
- 8 崔光植によると、釜山刑務所の名籍表には、1919年3月30日保安法違反で孫が逮捕されたことになっている。崔光植《2002年12月^の文化人物 孫晋泰》文化観光部、2002年、6頁。崔光植(新たに発見された孫晋泰の遺稿の内容と性格)、韓国歴史民俗学会編、前掲書、274頁。
- 9 『東洋文庫十五年史』(1939年、東洋文庫、12頁)には「孫晋泰 司書 昭和7年12月25日就任~昭和9年2月8日退職」となっている。1927年、大学を卒業してから勤めていて東洋文庫で正式に司書となったのは、1932年以降だったようである。
- 10 金容燮 (わが国の近代歴史学の発達) 《文学と知性》4号、1971年夏(引用は李佑成・姜萬吉編《韓国^の歴史認識下》創作批評社、1976年、493頁より)。
- 11 李基白 新民族主義史観論 《文学と知性》9号、1972年秋(引用は李佑成・姜萬吉編、前掲書、534頁より)。
- 12 金貞培 新民族主義史観 《韓国古代史論^の新潮流》高麗大出版部、1979年、225頁。
- 13 呉太任《孫晋泰^の新民族主義史学研究》淑明女子大学校教育大学院碩士論文、1992年、43頁。
- 14 韓永愚 孫晋泰^の新民族主義史学 《韓国独立運動史研究3》1989年(引用は韓永愚の《韓国民族主義歴史学》一潮閣、1994年、237頁より)。
- 15 金壽泰 孫晋泰^の植民主義史観批判 《吉玄益教授停年紀念史学論叢》日月書閣、1996年、605頁。

- 16 李弼泳 南滄孫晋泰^の 歴史民俗学^の 性格 《韓国學報》11 - 4、1985 年（引用は韓国歴史民俗学会編、前掲書、95 頁より）。
- 17 沈雨晟 孫晋泰論、前掲書、33 頁。
- 18 柳基善 1930 年代 民俗学研究^の 断面 《民俗学研究》2 号、1995 年、66 頁。
- 19 朴京夏 韓国民俗学史 《韓国史論》29、1999 年、17 頁。
- 20 宋華燮 民俗^と 思想 《韓国史論》29、1999 年、348 頁、400 頁。
- 21 中生勝美は、韓国研究者の世代的な差異による歴史認識のずれを指摘し、南根祐の研究を高く評価している。南の発表は「韓国民俗学を支えた重要な研究者が、いかに日本の民俗学の影響を受けて自らの研究を確立したかということ」を丹念に復元するという、従来の韓国の研究傾向とは異なるものであった。この発表には年配の研究者から激しい質問やコメントが出されたが、それらは筆者の見るところイデオロギー的な観点からの批判であり、発表の根幹にかかわる議論とはならなかった」と指摘している（中生勝美「《動向紹介》人類学と植民地研究」『思想 957』2004 年 1 月号、103 頁）。
- 22 南根祐 孫晋泰学^の 基礎研究 《韓国民俗学 28》1996 年 12 月。
- 23 南根祐 孫晋泰^の 民族文化論^と 満鮮史学 《歴史^と 現実 28》1998 年 6 月。231～234 頁。
- 24 南根祐 土民^の 土俗^の 発見^と 新民族主義、韓国歴史民俗学会編、前掲書、145～150 頁。
- 25 『朝鮮古歌謡集』（刀江書院、1929 年）の窪田空穂の「序」を参照（全集 3 巻に収録）。
- 26 張泳敏の研究によると、解放後出版市場の悪条件の中にも関わらず、新国家建設という時代的な状況は空前の歴史関連本の出版ブームを生み出した。孫の歴史教育への情熱もそうした時代の流れの中で進められたことは言うまでもない。詳しくは張泳敏 解放直後政府樹立以前^の 歴史書^と 歴史教科書 《国史館論叢》105、2002 年を参照。
- 27 孫晋泰 新刊月評 震檀学報 第十卷 《文章》1 - 5、1939 年、全集 6 巻、517 頁。
- 28 孫寶基 （我々の民族の師匠、南滄孫晋泰先生の誕辰百年を迎えて） 《歴史民俗学 11》2000 年 12 月、12 頁。
- 29 趙潤濟 （私と国文学と学位） 《新生公論》2 巻 3 号、1952 年 8 月（引用は《陶南趙潤濟全集》5 冊、1988 年、太学社、378～381 頁より）。
- 30 《陶南趙潤濟博士古稀紀念論叢》1976 年、蛭雪出版社、15～16 頁。
- 31 趙潤濟は京城師範学校の教員を辞めて普専図書館で研究することとなるが、孫との交流は「震檀学会」での活動から始まったと思われる。また孫は、趙の本の跋文を書いたこともある（孫晋泰 跋文、趙潤濟著《朝鮮詩歌史綱》1937 年、東光堂書店）。
- 32 孫寶基 孫晋泰 《政経文化》1985 年 1 月号、429 頁。
- 33 南根祐 土民^の 土俗^の 発見^と 新民族主義、前掲書、154～165 頁。
- 34 同上、163 頁。
- 35 緑旗連盟については次の論文を参照。
- 朴成鎮 日帝末期 緑旗聯盟^の 内鮮一体論 《韓国近現代史研究》10、1999 年。
- 李昇燁・鄭惠瓊 日帝下 緑旗聯盟^の 活動 《韓国近現代史研究》10、1999 年。
- 李昇燁 緑旗連盟^の 内鮮一体運動 研究 - 朝鮮人 参加者^の 活動^と 論理^を 中心^に 韓国精神文化 研究院 韓国学大学院 碩士論文、2000 年。
- 李昇燁「朝鮮人内鮮一體論者の轉向と同化の論理 - 緑旗連盟のイデオロ - グを中心に」『二十世紀研究』2、2001 年 12 月。
- 高崎宗司「緑旗連盟と「皇民化」運動」『三千里』31 号、1982 年 8 月など。
- 36 孫晋泰「農村娯楽振興問題について」『緑旗』6 - 6、1941 年 6 月、159 頁。
- 37 同上、159～160 頁。